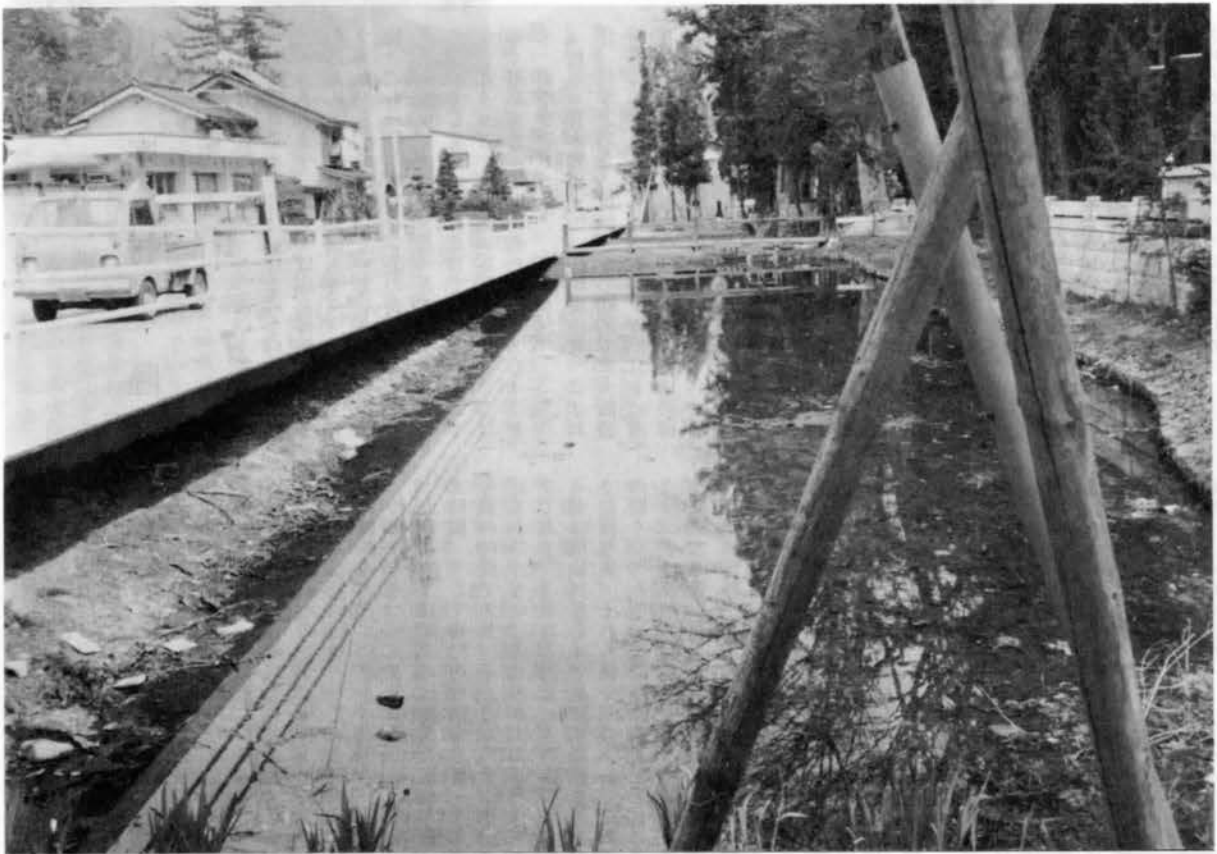


山と博物館

第32巻 第8号

1987年8月25日

大町山岳博物館



復原された仁科氏大町居館外堀跡と棧道式通学路

天正寺仁科氏居館跡の史跡指定について

最近急速に高まってきた土地の開発によって、重要な史跡や歴史的遺構が次第に変容され、破壊されつつある。これをなくすためには、地域住民の理解による史跡保存思想の啓発と、地主の了承による史跡指定の促進等、恒久的保護策を早急にすすめる必要がある。

特に大町には、仁科氏五百年の歴史に関係する居館跡や城砦跡等、重要な史跡が数多く残されている。すなわち、館之内居館跡、天正寺大町居館跡、南城北城、森城跡と一連の支館、支城、城砦等がそれである。

それ等のうち天正寺は、仁科氏滅亡の数年後、その居館跡に建てられた寺である。徒つて、本郭、二の郭、それをめぐる外堀跡、本郭を取り巻く内堀跡、土居、古木、黒門跡に再建された山門等が残り、当時の面影を知ることができる。特に大町西小学校裏門に通ずる道路沿いの外堀跡は、墓地化している西側や水田化している東側の外堀跡と共に、最もよく旧態を保存している。

天正寺の遺構保存については、私も直接関係してきた一人であるが、昭和五十九年、市の史跡に指定されることになったことは誠に喜ばしい。そのきっかけは大町西小学校裏門へ通じる通学路の拡充問題であった。現状のまま道路を拡張しようとすれば、貴重な外堀跡を縮小させるを得ない。一方は登下校児童の安全対策であり、他方は史跡保存の問題である。何れも重要であって二者択一というわけにはいかない。なお、天正寺の所有地は外堀の一部に過ぎない。

そこで外堀の地主の深い理解と協力にもとづき、市当局、市教委、天正寺の間で再三四協議を重ねた結果、妥結したのが棧道方式による通学路の拡張と外堀の復原、本郭を中心とする史跡指定であった。この上は更に二の郭の指定は勿論、一日も早く残された他の史跡指定への努力を切望して止まないものである。

（大町史談会長上條為人）

古い写真をめぐって

峯村隆



写真①

はじめに
 “AはBではなくCだった”というまでにくつも寄り道をしなければならぬことがときどきあります。たとえば山岳博物館では上の写真(①と②)の外国人をウイリアム・ガウランドとして展示していましたが、実は2枚は同一山行のもので、①の人物はドント②の人物はゴースデンだったので、あっさり言ってしまうと古い写真をめぐってしばらく道草を食ってはいただけではないでしょうか。

ガウランド

『新編・日本登山史』(山崎安治著)によれば、化学と冶金の技師として明治5年大阪造幣寮に招かれたイギリス人ですが、日本に滞在した16年間に近畿・中国・九州の古墳の研究も手がけ日本考古学の父といわれています。

写真②

日本の山々の登山に関してガウランド自身の書いたものは今のところ見つかっていません。しかし北アルプスだけでも御岳(明治6)立山(明治8)、槍・乗鞍(明治10)、爺岳(爺ヶ岳)、五六岳(蓮華岳)などに登ったことがガウランドの発言や役所文書(※1)、同時代に鉱山学などの教師として来日したイギリス人、ミルンの講演(※2)で知ることが出来ます。また明治14年刊行のサトウ、ハウス共編『中部および北方日本旅行者案内』(※3)の中部山岳地帯の記事はガウランドの資料が基礎になっているといわれます。

ガウランドはこのように、日本の登山史のうえではウエストン以前の先駆的な外国人登山者といえます。先の案内書の編集中、越中・飛騨・信州の山地をはじめて日本アルプスと呼んだのもまたガウランドでした。

- *1 三井物産「ウエストンをめぐる人々」W・ガウランド「旅人889」には「ジョウラウ・ウィカール・ウィーナル」第七号と高山町事務所日記
- *2 明治13年、日本アジア協会での講演「日本における氷河時代の遺跡」
- *3 A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan, 1881

展示写真への疑問

一昨年8月のこと、登山史を研究されている川村宏氏が来館され例の写真を見て、2枚ともガウランドは疑わしく、特に①の写真の外国人は見おぼえのあるドントではないか?と指摘されたのです。後日、川村氏はガウランドではない根拠として、当時の写真技術上の制約をあげています。

つまり、ガウランドが中部山岳の高岳に立った明治6〜10年ころは膨大な器材と長い露光時間、そして専門の技師を必要とする湿板写真の時代であり、そんなものを山へ担ぎあげるわけがない。ところが①の写真はスナックである。これほど自然に人物の動きが撮れるのは明治16年日本で最初に撮影されたという乾板写真、それも感光剤の改良で露光時間の短くなった明治後期以降のことである。ガウランドは明治21年日本を去っており、写真技術史とのズレが大きい。要旨はこうでした。

山岳博物館でこの2枚を展示したのは昭和57年から。ガウランドとしたのは元になった『加門治の小屋発行』(※4)『日本アルプス命名者』ゴードランド ウェストン 両氏登山記念絵葉書”の説明によります。寄贈された博物館にあった4枚組の絵葉書で、1枚は槍ヶ岳坊主の岩室のウェストン・嘉門次・根本清蔵、1枚は雪渓を横断する嘉門次・ウェストン夫人・清蔵を撮った①には有名な写真、あとの2枚は例の写真で、②には「ウイリアム・ゴードランド氏 大槍の雪渓にて」と説明書きがあるのです。他にガウランドと断言できる根拠はなにもありません。指摘をうけて改めて眺めてみて、他のガウランドの肖像との差、一般的な明治前期の登山装束との隔たりが増すばかりでした。

*4 絵葉書の入っている封筒にはこう書いてある。

嘉代吉とドント

川村氏の指摘に対してこちらの調べは、加門治の小屋発行”がほとんど唯一の手がかりでした。とりあえず嘉門次小屋の四代目・上条輝夫氏が昭和54年に発行した『三代の山』嘉門次小屋一〇〇年のあゆみ”をめぐってみました。すると、なんと②の写真が「雪倉岳にて 中央 嘉代吉」という説明でのつていたのです。文章中にこの写真の解説はなく、巻末の嘉門次小屋年表でも嘉門次の息子嘉代吉がいつ雪倉へ行ったかわかりません。しかしこの写真の中央が実際に嘉代吉だとするとガウランドの活躍年代と大きくズレ、少なくともガウランドでないことがはっきりします。

(※5)そして、よく見ると①の写真の前から三人目の人物もその格好から嘉代吉らしく見え、②の左の人物と①の最後尾の人物が同じ服装をしているではないですか。ほんとうに嘉代吉かどうかはともなく、ここでやっと2枚は恐らく同一山行のものだとわかったのです。外国人ばかりに注目してはいけません。

さて一方、ドントとはどんな人物なのでしょう。『新編・日本登山史』や古い日本山岳会機関誌『山岳』などを総合して得られる情報は次のとおりです。

The Dawn 明治末から大正13年4月まで神戸に在住のカナダ人、バキューム石油会社に勤務。在日中に神戸の山好きの在日外国人を中心に結成した Kobe Mountain Goat Club (以下M.G.Cと略)を主宰。大正4年から13年までM.G.Cの活動報告書といった趣の英文誌『NAKA』を16巻まで発行。大正4年、加賀正太郎・高野鷹蔵の紹介で日本山岳会に入会。当時の会員では今村幸男・塚本永亮らと親交があり彼らのはからいで大正13年の離日にあたってその活動をたたえる日本山岳会からの送別の辞をうけている。『山岳』によれば(※6)大正4年赤石岳、5年北岳

6年鳳凰山群、7年水晶・薬師・立山をはじめ日本各地の高岳を精力的に登っている。とりわけ大正6年のゴースデン(J. G. S. Gauden)、長野武之丞との鳳凰山地蔵仏のウエストンらにつぐ第三登は、日本における先覚的な岩登りの実践であり、同じ神戸の藤木九三らのロック・クライミング・クラブ誕生(大正13年)の刺激だったという。

ドーントに関して割合すぐに手に入った情報はこれくらいでした。いったいこの二人に接点があるのでしょうか。

②の写真の中央がほんとうに嘉代吉であり雪倉なのか。写真の外国人がドーントである確証が得られるのか。調べるにつれガウランドの影は薄れ、この二点に重点が移ってきました。

川村氏はウエストンを軸にした登山史に特に詳しく、しかも(こちらにしてみれば)偶然にも上条輝夫氏とは長年の友人、しかも『三代の山』の編集人のひとりだったのです。

「雪倉岳にて 中央 嘉代吉」について写真を担当した他の編集人の方に確認していたところ、雪倉岳としたのは上条家のアルバムにこの写真があり、裏面に雪倉岳と書いて



写真③ S60.10 川村宏氏を送ってくれた写真を複写したもの

川村氏もこの後で書かれているように、他に特別な確証はないものの、あの2枚の写真はこの登山のもので、①の先頭は下

であつたため、嘉代吉については上条家の人たちも含めて検討し、ほぼ間違いないということを使った。この情報をお願いしました。またドーントに関しては鮮明な肖像写真③を照合にと借してくださいました。この写真と①の外国人、顔つき・体型・服装——どれを比べてもよく似ている。いや十中八九これはドーントです。

★5 三代の山の嘉門次小屋表にれば、嘉代吉は明治4年(1871)出生、明治6年(1873)で2歳、明治21年(1888)で17歳である。
★6 第10年第三号の「SCRAMBLES IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS, Part I-V」を

接点

「NAKA」については先に少しふれましたが、とうとうここで二人は結びつきました。大正4年発行の第一巻第十七章。大正元年8月の山行記録。川村氏が見つけられ、10月をはじめ次に引用するお手紙をくださいました。

(前略)第十七章でタイトルは「The Lotus Group」です。蓮華山群とでも訳すのでしょう。筆者名はありませんが多分ドーントとします。神戸からドーントと長野武之丞が発し、米原でゴースデンと合流しています。

一行は米原から糸魚川へ行き、根小屋で一泊、山の坊から蓮華温泉と、明治27年のウエストンとほぼ同じコースを辿っているようです。そして案内は嘉代吉とあります。嘉代吉とはどうして連絡したのか、何処で合流したのかは書かれていません。この時の登山でドーントは8月23日に雪倉岳、27日に白馬岳、9月1日に立山に登っています。

(後略)

川村氏もこの後で書かれているように、他に特別な確証はないものの、あの2枚の写真はこの登山のもので、①の先頭は下



日本アルプスの開拓者たち(1) 嘉門治とウエストン

写真④

ドーント、ひとりおいて嘉代吉、最後尾が長野武之丞、②の右はゴースデン、中央が嘉代吉左が長野ではほぼ間違いないでしょう。ガウランドの写真、はこうして一応の決着をみました。最初の指摘以来、川村氏の労を惜しまない情報の堀り出しと提供がなければいつまでも誤りに気づかなかつたかもしれせん。ありがとうございます。

追記

ここ大町近辺は夏場の北アルプスと山麓の自然が魅力の観光地であり、山岳博物館を訪れる方も木枯しから雪どけまではとても少なくなります。わたしたちはこの時とはかりにまとまった時間の必要な仕事をこなすのです。資料整理もそのひとつ。

11月のはじめ、未整理の書籍や冊子類に埋もれている雑誌に出くわしたのです。目で見ると歴史といった趣の『画報 風俗史 第14集 明治時代(3)』といい昭和33年国際文化情報社の発行です。なぜこのような場違いな感じの雑誌があるのか、へんと思つて聞いてみてよかったです。赤坂離宮・女学生風俗・日比谷焼打事件・活動大写真……なれば俗の興味でとは見ながら次にめくつた九五八ページ(写真④)は驚きました。

上段右の写真(写真⑤)の説明は「ウエストン(1861~1940) Walter Weston 英国

山岳会々員。明治21年(1896)三たび来日、滞日13年。牧師でしたが日本アルプスを世界に紹介した人として有名です。写真は蓮華温泉小屋での彼。



写真⑤

「ウエストン写真帳」(大町山岳博物館蔵)から。となつており、下段の写真(写真⑥)では「蓮華温泉小屋でのウエストン一行 ガイドが雨具用のコウモリ傘とビツクの短いピッケルを持っているのに注意。中央のマドラスパイプをくわえているのがウエストン。蓮華温泉は北アルプス白馬乗鞍の北麓にあります。ウエストン写真帳」より。"となつて

ウエストン?これはドーントではありませんか。写真がなんと山岳博物館の提供だというので当時を知る館員に尋ねると、「ウエストン写真帳」はそのころ上条家からお借りしていたものである。蓮華温泉小屋については写真帳の記載に準じてのことでした。

蓮華温泉小屋は別の明治43年撮影の小屋の写真と照合して間違いありませんでした。一方⑥の写真のドーントの服装は靴下の柄まで①のドーントと同じです。ドーントの右わきの男も左はしのガイドの服装もまたしかり。

長野と嘉代吉です。(※7)この2枚もまた大正元年8月の登山のものだったのです。

資料整理もばかになりません。
*7 写真⑥は左のガイド以外をトリミングされ代表として三代の山にも使われています。

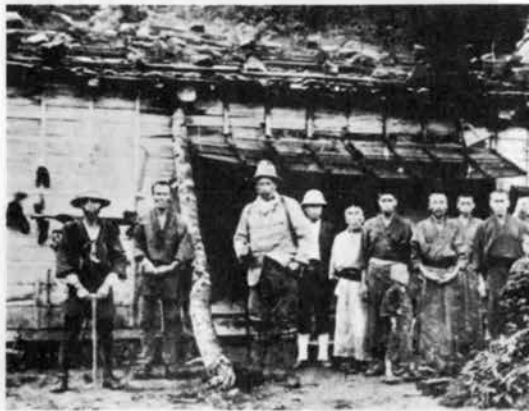
一行の足どり

川村氏のお手紙でドーント一行の登山の概容はつかめました。しかし古い写真達が息を吹きかえした今、最後となりましたが記録にそって少し詳しく足どりをたどるのも悪くありません。昔の登山のこと、実際のルートや位置に関しては登山史家・長沢武先生のご助言がなければ推定できなかったことを感謝して付記します。各地名や場所の()内は推定した位置の現在の一般的な呼び名です。

雪倉岳登山

M・G・Cの『INAKA』第1巻第17章によれば蓮華温泉到着は大正元年8月22日。雪倉岳は翌23日に登ったようです。

早朝出発、天気は良好。最初の1マイル(約1.6km)は西に向かって(平馬ノ平南側の)ジャングルのような中の荒れて滑りやすい道を行く。瀬戸川を渡り急落する尾根にとりつ



写真⑥

く。数分登ると古い銀鉱山の建物(雪倉鉱山製錬所)に達した。ここからの道は良かった。所どころけわしいが、場所によって4〜5フィートも道幅がある。このあたり(下巴)からは大蓮華・小蓮華そして大岩壁(蓮華菱)、雄大な残雪などが一望できる。しかし鞍部(上巴の鉱山事務所あたりか)を越えてからはガスが一切の視界をさえぎった。七三〇〇フィート(約二二二五m)地点の別の銀鉱山の廃屋(塩谷精錬所)で昼食。雪の斜面を登り、岩峰の立つヤセ尾根を越え、約二一三〇〇ヤード

(一八三一二七四m)幅の道なきハイマツ帯を苦労の末切り抜けた。ここからは長い尾根をやや楽に登り、午後1時50分、海拔八三六六フィート(約二五五〇m)の雪倉山頂に立った。(※8)

下りは同じルートであったが、ガスがますます濃くなったのでハイマツ帯ですわりこんで晴れるのを待った。しかし晴れるどころか雨がふり出す。仕方なく昼食をとった廃屋で30分雨やどりをする。だが少しも好天に向かう気配がないので重い腰をあげて一気に下る。足をひきずり、ぐっしょりぬれて温泉に帰りついたのは翌すぎも遅くだった。

大池の断念

翌24日は雨のため小屋に滞在。翌25日、小屋ごもりにうんざりした一行はまだ天候が回復しないうちに、裏道から、大蓮華山の湖(白馬大池)をめざします。裏道は一昨日の雪倉へのルートの瀬戸川の渡渉点から沢ヅメに湖までついているはずなのですが、2マイルさかのぼったところで踏跡さえなくなり

ます。急峻でもうい岩場の登り、樹林帯の通過などで思いがけず時間をくいと、雨も激しくなって断念。午後3時、疲れ冷え切った温泉



推定される一行の足どり

た険しい沢道をとった。ところどころロープも使用する大変な注意と体力の必要な下りだった。温泉到着午後5時30分。出発して12時間以上。食事のための三回の短い休みのをのぞき歩きづめで蓮華山群の最高峰白馬岳と大蓮華山に登ったのである。

目的を達した一行は28日蓮華温泉を発ち4里の道を千国へ。ここから馬車で白馬山麓の村々、仁科三湖を通り、家々の軒先に益提燈のあかりがゆれる大町へ着いたのです。

古い写真はさらに生き生きと甦った気がします。

しかし長沢武先生のご助言をいただいたにもかかわらず大変な拙訳をもとにしていまして、どこまで以上の要約と、ルートと位置の推定が妥当か自信がありません。詳しい方での記事を目にして不適當な箇所を見つけたら是非ご一報お願いします。

*8 標高や方位を考慮すると、実際は樹ヶ岳(二五二六m)に標高の可能性もある。

おわりに

ガウランドが実はドーントやゴースデンとわかって、実際にした展示上の変更はわずかに15字、1cm×10cmの写真説明ラベルのはりかえだけでした。ただ、このラベルは見ただけよりも重く厚かったことを遅ればせながら記録しておきたかったです。長らくおつきあいありがとうございました。

(大町山岳博物館職員)

(参考)

『北アルプス白馬連峰』長沢武著 郷土出版
『近代日本登山史』安川茂雄著 あかね書房

山と博物館第32巻第8号

発行所 長野県大町市 TEL22-0211
印刷所 大町山岳博物館
定価 年額一、二〇〇円(送料共一切不可)
郵便振替口座番号(長野四二二二九九三)